

50

小森桃塙著『泰西方鑑』の引用書からわかった
ライデン学統の Iatrochemistry の影響

相川 忠臣

日本赤十字社 長崎原爆病院

シルヴィウス Sylvius, F. dele Boë はライデン大学の教授であり、セシリア病院で全欧州から集まる医学生を患者のベッドサイドで指導し、病屍を解剖して教授した。脳神経系の解剖で有名であるが、ライデンの Iatrochemistry (iatro-, 医師, 医療の意) の学統の基礎を築いた。化学実験室で、植物等を水や加熱油で軟化し溶出、蒸留により製煉して薬剤を得るだけでなく、動物を解剖し実験に用いて食物の消化発酵に酸とアルカリが関わることを示し、腸管からの乳糜がリンパ管を経て胸腔から右心に入り全身に至るといふ彼の生理学的な Iatrochemistry はアムステルダムスのブランカールト Blankaart, S., ライデン大学のブルハーヴェ Boerhaave, H. に引き継がれ発展した。

宮中縫殿寮医師で、解屍を行い乳糜脈を調べた小森桃塙が著した『泰西方鑑』1829 の引用書は 94 に及ぶ。この書は五巻、代薬説、治法総括、熱病に始まる無定處病、次いで頭脳、頸、胸、腹、女科、唾(幼)科、中毒、救急と外科からなる。末尾附録に製煉薬及代薬未明諸品篇がある。引用書にある識爾峙斯シルリュス、蘭失倅篤ランシロットと普斂幾プレんキの三方剤製煉書に着目した。中世までラテン語系言語で u と v を区別しないから、v を u としてのシルリュスをシルヴィウスと判断した。シルヴィウスの方剤製煉書は *Praxeos medicae idea nova. liber primus.* 1671 であろう。ライデン大学でシルヴィウスに学んだテン・ライネ Ten Rhijne, W. は将軍の招きで 1674 年に来日し 2 年間滞在した。医学、植物学だけでなく化学に優れていたことも彼が将軍の医師に選ばれた理由である。彼がシルヴィウスの方剤製煉書の紹介者であろう。彼は日本で鍼灸を研究し、*Dissertatio de arthritide: Mantissa schematica: De acupunctura et orationes tres.* 1683 を出版した。ブランカールトは痛風についての著書 *Over het podagra en vliegende jicht.* 1684 にテン・ライネの鍼灸の報告を採り入れている。ランシロット方剤製煉書はブランカールトが翻訳出版に関わったイタリアの Lancillotti, C. の *Gv(u)ida alla Chimica.* 1674 の蘭訳書、*De brandende salamander ofte ontleding der chymicale stoffen.* 1680 である。『泰西方鑑』で頻用される勃郎加盧都ブランカールツ内科治療書は *Nieuw lichtende praktyk der medicynen.* 1680 である。その附録 *De nieuwe hedendaagsche stof-scheiding, ofte chymia.* は方剤製煉書であり、ランシロットの蘭訳書にブランカールトが付け加えたと同じ製煉器具図 4 つとその説明及び製煉の表を含む。分析学の意の *Scheikunde* はブランカールトの造語である。Iatrochemistry の伝統はブランカールトを経てブルハーヴェに引き継がれた。ブルハーヴェの *Elementa chemiae,* 1732 は英訳され、欧州・英国に影響を与えた。しかし日本で読まれた形跡を見つけていない。『遠西醫方名物考補遺』(宇田川榛齋・榕庵) の引用書にある涅垵爾獨乙都ネデルドイツ局方は *Boerhaave en al., De nieuwe Nederduitsche apotheek.* 1766 である。宮下三郎氏はこの書を『新撰和蘭局方』(宇田川玄真, 東京大学 鸚軒文庫蔵) の原典としている。以上のようにライデン学統の Iatrochemistry が日本に影響を及ぼしていた。普斂幾プレんキ方剤製煉書はウィーンの *Plenck J.J. 著, Grondbeginselen der scheikunde.* 1803 であり、そのラテン語原典は *Elementa chymiae.* 1801 である。